宮城県文化財調査報告書第94集

南小泉遺跡

昭和58年3月

宮城県教育委員会

私達の生活している宮城県内には、祖先がのこした数多くの遺跡があります。 これらの文化遺産は、豊かな自然環境と長い歴史の中で創造し、育ぐくんできたもので あり、これを愛護し、活用するとともに後世に伝えていくことが現代の私達の重要な責 任であると考えます。

本報告書は、宮城県教育委員会が法務省東北少年院の建設計画に関連して発掘調査を実施した『南小泉遺跡』について、成果をとりまとめたものであります。

ここに、本書を刊行するに当たりまして、関係された方々の御協力に深甚なる敬意を 表しますとともに、遺跡に対する御理解の一助となり、さらに学術上にも大きく役立つ ことを切に念願するものであります。

昭和59年3月

宮城県教育委員会 教育長 三浦 徹

例 言

- 1. 本書は法務省東北少年院建設に伴う発掘調査について作成した報告書である。
- 2.調査の主体者は宮城県教育委員会、法務省である。
- 3. 発掘調査は宮城県教育委員会が担当した。
- 4. 土色は「新版標準土色帖」(小山・竹原:1973)を、土性区分は国際土壌学会法の基準を参照したものである。
- 5.整理・報告書の作成は文化財保護調査係が行なった。「調査に至る経過」は佐々木茂槙、 その他については菊地逸夫が担当した。
- 6.遺跡の出土遺物、写真、実測図等は、宮城県教育委員会に保管している。
- 7. 調査時、4号溝としたものは、後世のものと考えられるため記述からは除いた。
- 8.報告書の作成にあたり、東北歴史資料館藤沼邦彦氏には、多くの助言、指導をいただいた。

調査要項

遺跡所在地:宮城県仙台市古城三丁目311(調査地)

遺跡記号:HE(宮城県遺跡地名表登載番号:01021)

調 査 期 間:昭和57年7月14日~9月7日

調査面積:26.334m²

発掘面積:6062m2

調 査 員:調査第一係長 佐々木茂槙

技 師 丹 羽 茂

佐々木和博

手 塚 均

菊地逸夫

目 次

調査に至る経過	4
遺跡の位置と環境	4
調査の経過	8
調査の成果	8
1.調査区内の基本層位	8
2.発見された遺構と遺物	8
竪穴住居跡と出土遺物	8
掘立柱建物跡	13
井戸跡と出土遺物	13
溝と出土遺物	17
土壙と出土遺物	22
その他の遺物	24
考 察	26
1. 出土遺物とその年代	26
2. 遺構とその年代	28
3.遺構の性格	28
ま と め	31

調査に至る経過

南小泉遺跡は、現在の仙台市遠見塚一丁目、二丁目、南小泉二丁目、古城三丁目、南小泉字伊藤屋敷、字遠見塚西、字村東、字霞ノ目を含む広範囲にわたり、弥生時代から古墳時代を要素として、一部はさらに古代から中世、近世に至る長い年代の大複合遺跡である。

本書で報告する遺跡は、上記のうちの仙台市古城3丁目に位置し、旧河川によって形成さた自然堤防上に立地している。発掘地点は宮城刑務所の農場にあたり畑地として利用されていた。

宮城県教育委員会が本遺跡を発掘調査するにいたった契機は、東北少年院の同地におけ 建設計画にある。

法務省仙台矯正管区より、古城3丁目311地内の畑地26,334m²を東北少年院の敷地として、ここに建物施設およびグラウンド等を造成したいとの意向を伝えてきたのは、昭和57年春であった。宮城県教育委員会では、計画場所が南小泉遺跡の一角を占め、その現状変更にあたるために、直ちに現地の分布調査を行ない、それをもとに設計の検討と協議を重ねた。

その結果、建物施設の建設箇所は事前の発掘調査、グランド造成部分は遺構の確認調査を

行うことになり、昭和57年7月14目から9月7日までの期間に、文化財保護課が担当して、これを実施した。

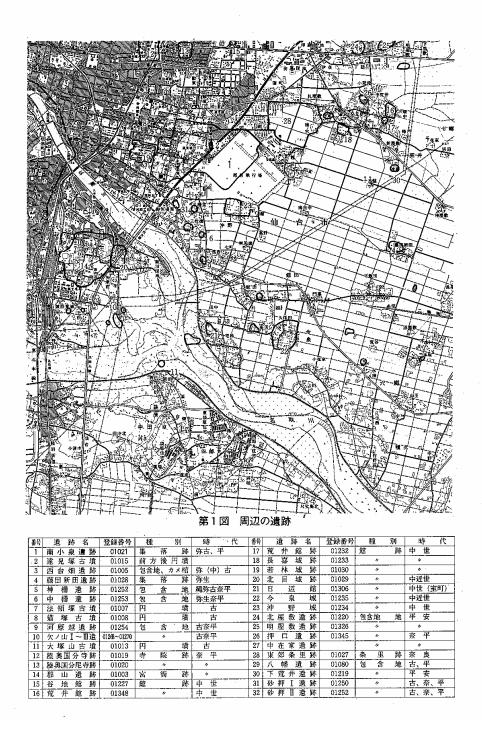
遺跡の位置と環境(第1.2図)

南小泉遺跡は仙台駅の南東約415kmの位置にあり、仙台市遠見塚一丁目、二丁目、南小泉 二丁目、古城三丁目に所在する。

遺跡は、東北第三位の規模をもつ前方後円墳「遠見塚古墳」を中心に東西約1.8km、南北約1.0kmの広い範囲にわたる、弥生時代から中近世までの複合遺跡である。

この遺跡が知られるようになったのは昭和11年頃からで、耕作の際天地返し筆で土器・石器が発見されたのが始まりである。また昭和14年の霞ノ目飛行場の拡張工事の際100を超える竪穴住居跡と多最の土器・石器が発見され、沖積地内にも古代の集落が存在することで注目をひいた。その後遺跡は都市計画道路、青葉学園、宅地造成の工事等により発掘がくりかえされ、弥生時代から古墳時代の集落は遠見塚小学校から霞ノ目飛行場にかけて集中する事が知られた。

仙台市周辺の地形を本遺跡を中心に概観してみる。仙台市は西部と東部で地形が大きく 二分される。西部は奥羽山脈から派生する高館丘陵、青葉山丘陵と、名取川・広瀬川の中 流域に形成された段丘地形とからなり、東部は仙台平野の一部である宮城野海岸平野から なっている。



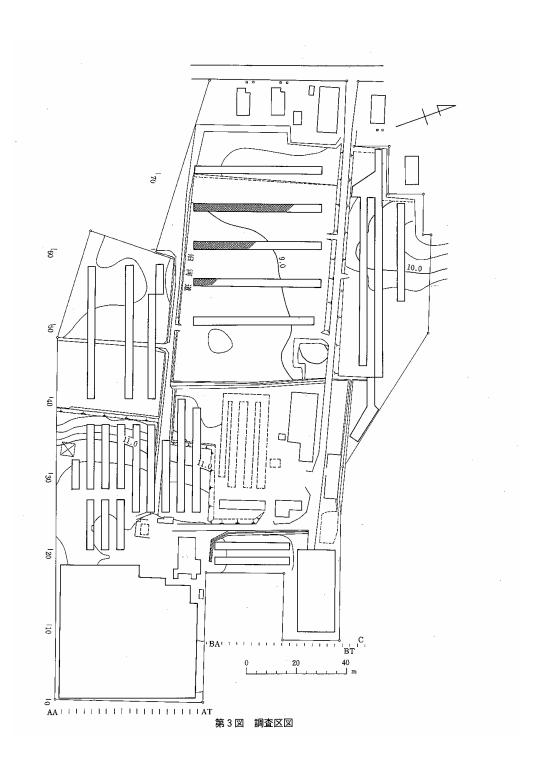
宮城野海岸平野の中で名取川流域の沖積平野は、自然堤防・後背湿地・旧河道からなり、海岸近くには現在の海岸線とほぼ平行して3列の浜堤が見られる。

南小泉遺跡は宮城野海岸平野の中央部西寄りに位置し、広瀬川左岸は自然堤防と網目状の低湿地、旧河道からなり、小規模な微高地と低地との複雑な地形をつくっている。

今回の調査区は、南小泉遺跡の中では東南端にあたる部分で、前述した旧河道の南側(海岸)に形成された自然堤防の微高地といくつかの小旧河道と思われる低地とからなる。自然堤防は調査区の東側と北西端に見られ、その間には低湿地が入る。旧河道はこれらの自然堤防の南側と東側に2本見られ、東側の自然堤防はこれらの旧河道、低湿地にかこまれ、独立した舌状の微高地を形づくっている。



第2図 遺跡周辺の地形



調査の経過(第3図)

今回の調査対象となったのは、南小泉遺跡の南東端にあたる仙台市古城三丁目311地内で、東北少年院の建設予定地26,334m²である。同地は宮城刑務所の農場として利用されていた。 調査は掘削の及ぶ建物施設の建設箇所については事前の発掘調査を、盛土等により保存のなされるグランド造成部分については遺構確認調査を行なった。

事前の発掘調査は遺構の集中すると考えられた自然堤防上については全面の表土を除去し 遺構の確認を行ない、その後精査を行なった。また旧河道部とそれに向う斜面については巾3 mのトレンチを3m間隔で設定し遺構の確認を行ない、調査区北西端で溝を検出した。

確認調査は自然堤防上については3m間隔で、それ以外の地域については12m間隔で巾3mのトレンチを設定して行なった。トレンチはすべて斜面にそって設定した。

発見された遺構には事前調査区から竪穴住居跡1軒・井戸2基・溝6本・土壙7基があり、それぞれ精査を行なった。また、確認調査区からは竪穴住居跡と考えられる落ち込みが1か所検出された。

出土遺物には土師器・須恵器・陶器・古銭・砥石・石鉢等がある。

調査は7月14日に始まり、9月7日に終了した。発掘面積は6,052m2である

調査の成果

1.調査区内の基本層位

層序は、地点により相違が見られ、大きく分けると自然堤防部と旧河道部とになる。以下 各々について述べていく。

自然堤防部: 表土下 (耕作土) 30~70cmで地山に達したが、場所によっては "天地がえし"等、の撹乱が1mにも及ぶ所がある。地山は沖積層でシルト層・粘土層・砂層から成り部分的に違いが見られる。遺構はすべて地山面で確認した。

旧河道部:表土下(耕作土)30~90cmで砂礫層に達した。なおその範囲は第3図に示すとおりである。

2. 発見された遺構と遺物

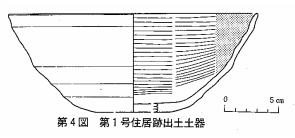
竪穴住居跡と出土遺物

第1号住民跡

A E 25区において住居の南側1/3ほどを検出した。南壁は約3mあり、検出部分から方形を呈するものと考えられるが、精査をしておらず詳細については不明である。遺構確認面の堆積十

中から土師器が出土している。

土師器・坏 (第4図)製作 にロクロを使用している。鉢 状のもので、体部から口縁部 にかけて丸みをもって外傾



している。内面はヘラミガキ (体は横方向・底部は不明) 黒色処理されている。 体部下半以下は磨滅のため調整等については不明である。

第2号住居跡(第5図)

[重複] 煙道部の一部が後世の撹乱によって切られている。

[平面形・規模] 3.2×3.2mの正方形である。

【堆積土】6層に分けられる。第1・2層は暗褐色土層で遺物を含み住居全体に広がる。第3層は褐色土層で壁ぎわに堆積している。第4・5は黒褐色土層で焼土粒・炭化物を多く含みカマド内に堆積している。第6層は暗褐色土層で周溝内に堆積している。なお、第2層は住居からカマドまで広がる堆積土で、細分される可能性があるが、区別できなかった。

〔壁〕地山を壁としている。壁の立ち上りは、ほぼ垂直で、高さ20~25cmある。

[周溝] 東壁・南壁の一部、西壁から北壁にかけての壁際に検出された。巾10~20cm、深さ約5cmで断面形は「U」字形を呈する。(南西隅及び北東隅は途切れている。)

〔カマド〕東壁の西寄りに付設されている。燃焼部と煙道部とからなる。巾70cm、奥行40cm あり、左側壁は住居壁を掘り込んで、右側壁は地山を削り出して構築されている。左側壁内面は瓦によって補強されていた。底面はほぼ平坦で約50cm四方に焼面が見られ、さらに奥壁近くには、凝灰岩の割石の支脚が埋め込まれていた。壁は約10cmほど立ち上り煙道部へと続き、煙出しピットがとりつく。

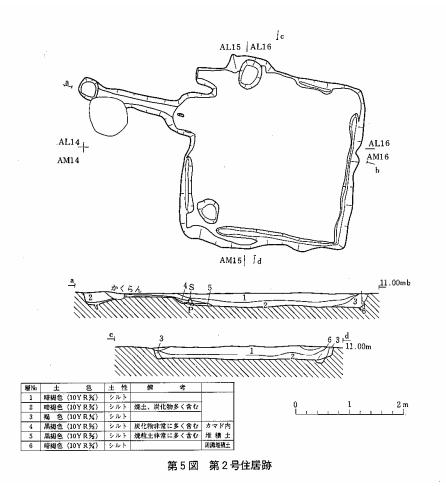
〔その他の施設〕南壁東寄りと北東隅の床面からピットが検出された。いずれも楕円形で径約60cm深さ約10cmある。柱痕跡等は認められず性格は不明である。

〔出土遺物〕堆積土第1・2層、床面、カマド内から土師器・須恵器・瓦・砥石が出土している。 この中で図示できたものは土師器3点、須恵器4点、瓦1点、砥石2点である。

○床面・カマド内出土遺物

土師器

〔坏〕(第6図1)製作にロクロを使用している。体部から口縁部にかけては直線的に外傾している。内面はヘラミガキ(体部横方向、底部放射状)黒色処理されている。底部から体部下端



は手持ちヘラケズリされており、底部切り離し技法については不明である。

須恵器

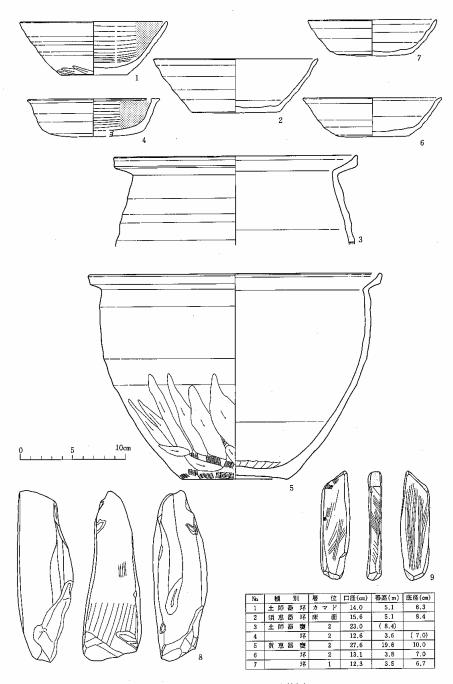
〔坏〕(第6図2)体部から口縁部にかけては直線的に外傾する。底部切り離し技法はヘラ切りで再調製はない。

瓦(第7図)平瓦で凸面縄叩き目、凹面布目のものである。模骨痕は認められず一枚造りである と思われる。

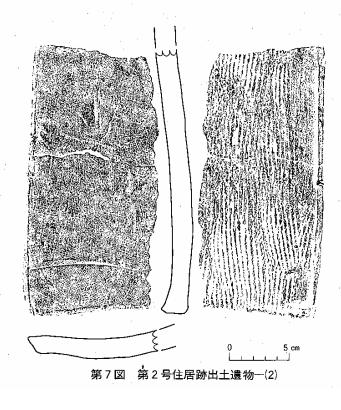
○堆積土出土遺物

土師器 坏と甕とがあり、いずれも製作にロクロを使用している。

[坏] (第6図4)丸底風の平底で、底部から体部にかけて丸味をもって立ち上りそのまま口縁



第6図 第2号住居跡出土遺物(1)



部へとつづく。口縁 部は端部が肥厚し、 口唇部は平坦で沈線 が巡る。内部横方面は 、方半(体部) 、大田である。 であり、底部切り、 については 、は、このいては 、は、このいである。

〔甕〕(第6図3)口縁 部から体部上半の破 片である。口縁部は 外反しその端部は上 に突き出ている。 須恵器 坏と甕とが

ある。

[坏] (第6図6・7)体部から口縁部にかけては丸味をもって外傾している。底部切り離し技法はヘラ切りで再調整はない。

〔甕〕(第6図5)鉢形のものである。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上りそのまま口縁部へとつづく。口縁部は外反しその端部は上に突き出している。内面は底部がナデッケ、外

面は体部下半が叩き後手持ちヘラケズリされている。底部は手持ちヘラケズリされており底 部切り離し技法は不明である。

砥石(第6図8・9)大形のもの(8)と小形のもの(9)とがある。(8)は目の荒い凝灰岩が、(9)は目の細かい凝灰炭が用いられている。使用面はいずれも4面で、擦痕が見られる。

掘立柱建物跡(第11図)

第1号建物跡

AQ、AR3~6区付近に位置する。1~3号溝の堆積土上面で確認された柱穴もあり、これらの溝より新しい。平面形は東西に長く、規模は桁行4間、梁行3間である。桁行の柱間は東側から4.2(2間分)+1.8+1.9m、梁行の柱間は南側から1.8+1.8+1.8mである。柱穴掘り方は円形及び楕円形を呈し、径約60cmある。柱痕跡の認められたものは6個ある。

第2号建物跡

A I ~ A K4・5区付近で南北に延びる5個の柱穴列が検出された。西側は溝と重複しており、確認できなかったが、建物跡であった可能性がある。柱間は南側から1.9+2.1+2.2+2.2mである。柱穴掘り方は円形及び楕円形を呈し径約50cmある。

井戸跡と出土遺物

第1号井戸跡(第8図)

AN14区に位置する。径約260cmのほぼ円形の掘り方の中央に一辺90cmの方形の井側を有するもので、井桁・井側の上部はすでに消失している。また、湧水が激しく基底部までは調査できなかった。井側は調査された約2.5mの部分の観察によれば、四隅に角材を立て、それに横棧をはめ、その外側に縦板をならべたいわゆる隅柱横棧型のものである。隅柱は荒く四面を削って約10cm角の材としたもので、一部には木の表面が残る。構棧は丸材と角材とがあり、隅柱に約45cm間隔で段違いに柄を切りはめ込まれていた。丸材は丸材の柄の部分のみ判って使用したもので、樹皮がそのまま残っているものも見受けられた。角材は丸木を割って大まかに削ったものである。縦板は巾20~40cm、厚さ約1.5長さ1m以上あり、表面は手斧削りされている。

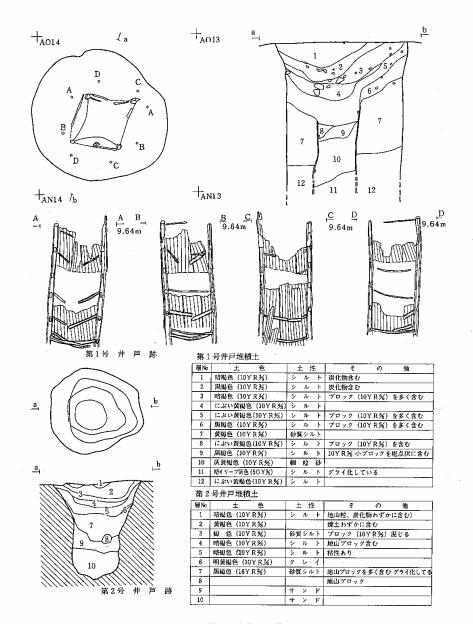
堆積土は、大きく井側内堆積土と掘り方埋土とに分けられる。井側内堆積土は、暗褐色~ 黒褐色を呈し上部には礫を多く含む。掘り方埋土は黄褐色を呈しシルト質のものである。

遺物は井側内堆積土第1層から陶器・土師質土器が、同第10・11層からは陶器・漆器が出土している。またこれらの遺物の中で、第1層のものと第10層のものには接合関係が見られ、井側内堆積土は一時期に埋められたものと考えられる。

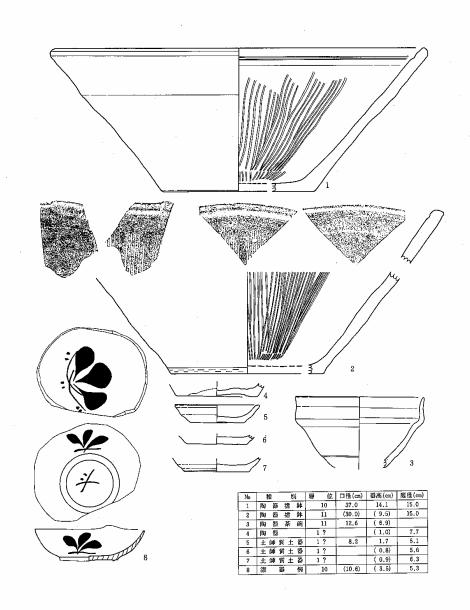
出土遺物

陶器 播鉢・茶碗・ 壺がある。

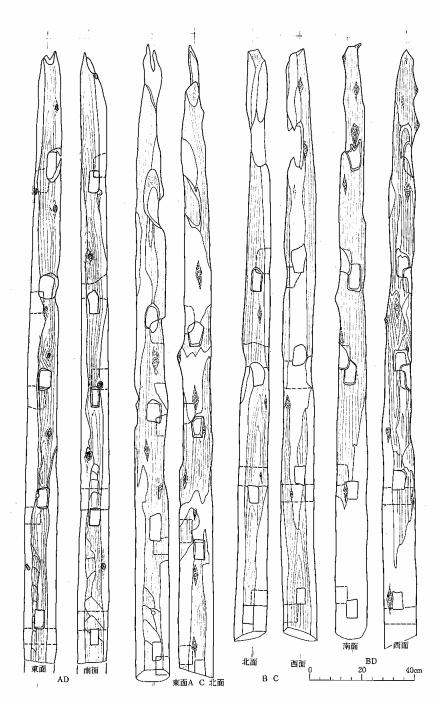
〔擂鉢〕(第9図1・2)いずれもロクロを使用しており無釉のものである。底部から体部にかけて外傾して立ち上り、そのまま口縁部に至っている。口縁部は端部が丸くおさまり、内面には沈線状の凹みが巡っている。内面は体部から底部にかけて4本単(1)5本一単位(2)の筋目が間隔をおいて刻まれている。また(2)と同一個体と思われる片口部が出土している。



第8図 第1・2号井戸跡



第9回 第1号井戸跡出土遺物



第10図 第1号井戸跡隅柱

第10図 第1号井戸跡隅柱

〔茶碗〕(第9図3)白天目茶碗の口縁部から高台脇までの破片である。高台脇から腰にかけて小さな段がつき胴部はそのまま外傾し口縁部との境に大きな段がつく。口縁部はわずかにくびれる。釉は淡緑色がかかった白色を呈し高台脇の下端部まで施されており、貫入が見られる。胎土は灰白色を呈する。

土師質土器(第9図5~7)

いずれも小形の皿である。(5)は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部切り離し技法はすべて回転糸切りで、再調整をもつものはない。

漆器(第9図8)椀形のもので口縁・高台端部が欠損している。全体に黒漆が施され、朱漆によって見込み、高台内・胴部に文様が描かれている。

第2号井戸(第8図)

AT4・5区に位置する。掘り方は1.6×1.8mの不整楕円形で、井側は検出されなかった。 深さは約1.8mある。壁は、底面から約1mまではほぼ垂直に立ち上り、上端に内かってゆるやかに開く。底面には凸凹が見られる。

溝と出土遺物

平場を囲む溝(第1~3号溝)(第11図)

3本の溝は調査区東端の南北に延びた舌状の自然堤防東側に、方形の平場を形づくるように 巡っている。調査によって確認された部分は西辺と北辺・南辺の一部で、北辺はさらに調査区 外へと延びる。また南辺は東側で開き、その部分には沢状の地形になる。平場の全的規模につ いては完掘していないため不明であるが、調査区の東側には南北に旧河道が走ることから、そ の延びは限定され、約40×40m程度であると推定される。また、これらの溝には切り合い関係 が見られ、西辺は内側から外側に内かつて2回拡張されている。

以下各々の溝について説明していく。

第1号溝は第2・3号溝を切っており、最も新しい。溝の規構は3本の中で最大で、南辺約4m両辺約39m、北辺14mあり、巾は1.0~3.5m、深さ1.0~1.3mある。断面は上端で大きく開く「U」字状を呈する。堆積土は7層に細分され黄褐色~褐色を呈する。全体的にグライ化しているが堆積土最下層は水成堆積物でない事から空堀であったと考えられる。

第2号溝は、第3号溝を切っている。南辺約17m、西辺約37m、北辺約6mあり、巾は1.0~1.5 m、深さ0.4~0.6mある。断面形は逆台形を呈し、堆積土は3層に細分される。空堀であったと考えられる。溝によって囲まれた平場は37×(20)mある。

第3号溝は第2号溝に切られており、3本の溝の中で最も古い。南辺約17m、西辺約37m、北辺6mあり、巾1.5~1.5m、深さ0.4~0.6mある。断面形は逆台形状で、堆積土は3層に細

分される。空堀であったと考えられる。溝によって囲まれた平場は36×(18)mある。

出土遺物 土師器が第3号溝、古銭が1号溝から、また各溝の堆積土の第1・2層から陶器が出土している。

土師器(第12図)

高坏の脚部被片がある。円錘状のもので内面はシボリ・ナデ、外面はヘラミガキされている。

陶器

甕と擂鉢とがある。いずれも小片で、全体形をつかめるものは出土していない。ここでは口縁部と底部、特徴的と思われる体部破片を選んで図示する。

[甕] (第12図2~4・7~9)口縁部には緑帯を有するもの(2)と、丸くおさまるもの(3・4)があり、(2)は内面に沈線状の凹みが巡り端部が突き出している。(4)は内面に沈線状の凹みをもつ。(7・8)は体部破片で、簾状格子目の押印をもつ。(9)は底部破片である。(2・3・7・8・9)は無釉で、(4)は内外面に灰白色の灰釉が口縁に平行に刷毛塗りされている。

[擂鉢](第12図5・6)いずれも底部から体部にかけての破片である。体部が直線的に外傾し(5)は底部が突き出している。筋目は見られない。内面は磨り減っている。

古銭(第11図10)欠損品である「和宝」の2文字が判読できる。

第5・6号溝(第13図)

5・6号溝は調査区の北東端、BO-15区付近に位置する。

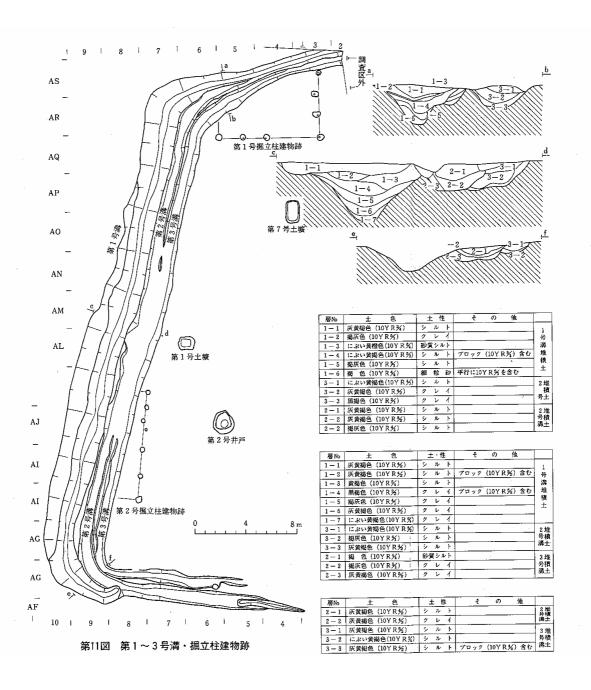
第5号溝は東西に走る溝で、東側で6号溝と直交し、さらに調査区外へと延びる。第6号溝との切り合いによる新旧関係は不明である。また第3~6号土壙をそれぞれ切っており、これらより新しい。巾約1.0m、深さ20~50cmある。断面形は逆台形状を呈する。堆積土は暗褐色を呈し、遺物は含まない。

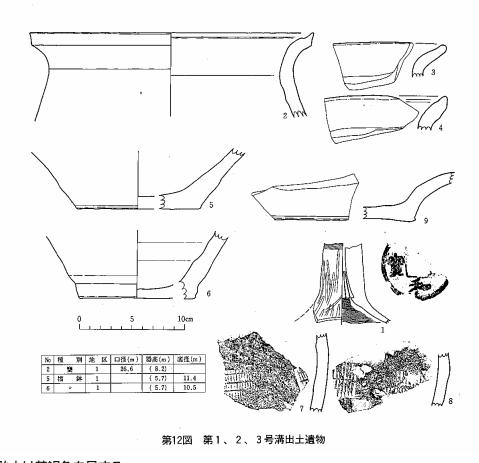
第6号溝は西北に走る溝で、北側はさらに調査区外へと延びる。巾0.6~0.8m、深さ約20cm ある。断面形は逆台形状で、堆積土は暗褐色を差し遺物を含まない。

第7号溝(第13図)

7号溝は調査区の北西端、CB-66区付近に位置する。南北に延びる溝で、北側はさらに調査区外へと続くが、南側は検出されておらず旧河道部に開らく可能性がある。巾6m深さ約1.5mあり断面形は「U」状と呈する。堆積土はシルト層、砂層から成り、底面は砂層で、水が流れていたと考えられる。調査区が狭く人為的なものか、自然の地形であるか判断できなかった。

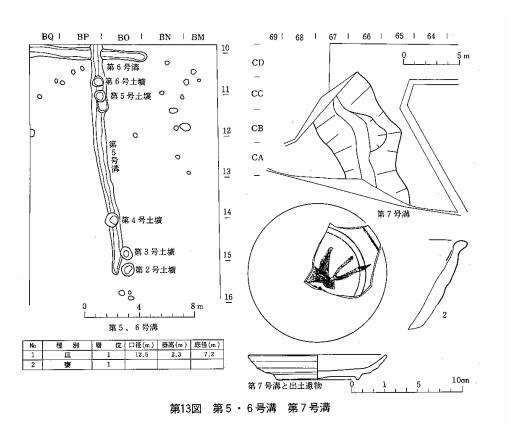
陶器(第13図1)台付の皿である。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上りそのまま口縁部に至っている。高台内を除く全面に灰白色の釉が施され見込みの部分には"あやめ"の花と思われる文様が茶褐色の釉で描かれている。釉には貫入が入り、重ね焼きの痕跡が認められる。





胎土は黄褐色を呈する。

土器(第13図2)整作にロクロを使用しており、甕形のものである。口縁部は外反し、その端部はは丸くおさまる。



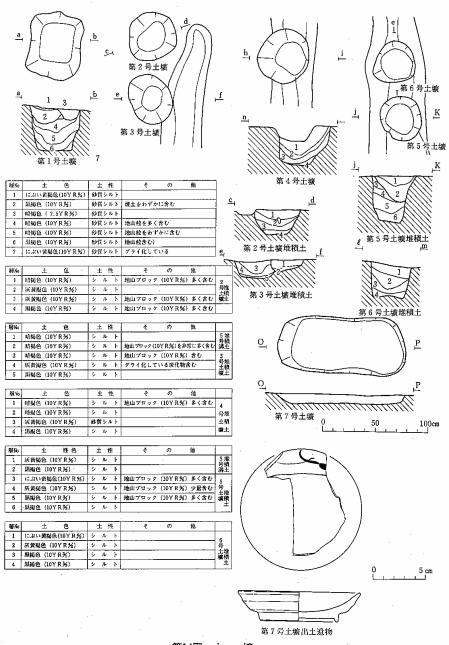
土墳と出土遺物(第14図)

調査区内から合計7基の土壙が検出された。平面形・断面形の形状から次の3つのタイプに 分類される。(1)円形を基調とし壁の立ち上りがゆるやかなもの2・3・4・5・6号土壙 (2) 方形を基調とし壁が直角に立ち上るもの、1号土壙 (3) 楕円形で皿状のもの7号土壙。

規模、堆積土等については表にまとめる。

○出土遺物 7号土壙から陶器が出土している。

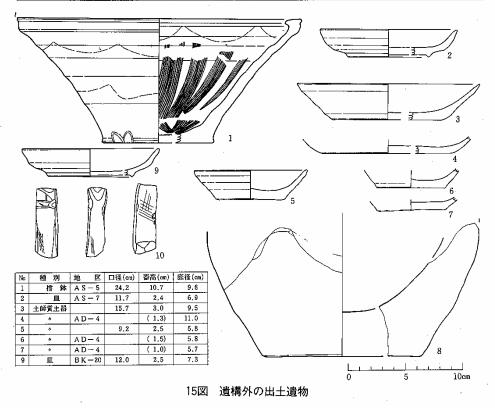
陶器(第14図)台付の皿である。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上り、そのまま口縁部に至る。高台内と除く全面に灰色の釉が施され、内面には文様が描かれている。胎土は灰白色を呈する。



第14図 土 壙

第1表 土壙一覧

	位 置	規 模 (cm)	深 さ (cm)	形	状	堆積土 (層)
1 号土 擴	A L — 5	100×120	80	方	形	7
2 号土 壙	B O - 16	100×100	45	円	形	4
3 号土壙	B O - 15	100× 70	30	楕 円	形	3
4 号土壙	B O - 14	100×100	80	円	形	3
5 号土 壙	B P - 11	90× 90	90	円	形	4
6 号土 壙	B P — 11	80× 80	60	不 整 円	形	4
7 号土 壙	A O - 3	100×250	15	長楕円	那	1



その他の遺物

遺構外出土の遺物としては土師器・須恵器・陶器質土器・砥石・石鉢・古銭がある。ここでは図示が可能である後5者について述べる。

陶器 擂鉢と皿がある。

[擂鉢](第15図1)体部から口縁部にかけて外反ぎみに外傾し、口縁端部は肥厚し内側に鍔状の隆帯を形成している。内面には13本1単位の筋目が間隔をおいて刻まれている。底部切り離し技法は回転糸切りである内面の全面と外面の上半に赤褐色のつけ釉を施し、さらに口縁部に

のみ重ねて黒褐色のつけ釉をしている。

[皿](第15図2・9)いずれも台付の皿である。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上りそのまま口縁部につづくもので、淡黄色の釉がでは高台内を除く全面に、では全面に施されている。胎土は、淡黄褐色を呈する。

土師質土器(第15図3~7)皿形のもので法量的に大形のものと小形のものとがある。形状はいずれも体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。底部切り離し技法はすべて回転糸切りである。石鉢(第15図8)底部から体部にかけての破片である。底部から体部にかけて丸味をもって立ち上がる。外面は、叩打痕が認められ、内面は磨り減ってなめらかである。安山岩質の石材である。

砥石(第15図10)小形のもので4面使用されている。擦痕が認められる。目の細かい凝灰岩で作られている。

古銭(第16~1~6)銭貸名の判読できたものはすべて北宋銭である。これらの中で(1)~(5)については5枚ひとまとまりの状態で出土した。詳しくは表のとうりである。













No	线货名	産地	初鋳造年	出土地区	層位
1	治平元宝	北宋	1064	AT-5	1
2	元豊通宝	北宋	1078	AT-5	1
3	元祐通宝	北宋	1086	AT — 5	1
4	元祐通宝	北宋	1086	AT-5	1_
5	治平通宝?	北宋		AT-5	1
6	元豐通宝	北宋	? 1078	A S - 5	1

第16図 古 銭

考察

1. 出土遺物とその年代

出土遺物は大きく分けて平安時代・鎌倉時代・桃山~江戸時代初期のものがある。ここではそれらを時代別に検討してみたい。

(1) 平安時代の遺物

第1号住居跡・第2号住居跡から出土した土師器・須恵器・砥石・瓦がある。ここでは第2号住 居跡から出土した土師器、須恵器について考察する。

〔土師器〕坏、甕があり、いずれもロクロを使用している。坏は体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾するものと、直線的に外傾するものとがある。内面はヘラミガキ黒色処理され、 外面は体部下半から底部全面がヘラケズリされているものもある。甕は口縁が外反し端部が上に突き出している。

〔須恵器〕坏・甕がある。 坏は体部から口縁部にかけて丸味をもって外傾するものと直線に外傾するものとがある。 底部切り離し技法はいずれもヘラ切りである。 甕は鉢型のものである。

これらの中で土師器はロクロ使用という製作技術の特徴から、東北地方における編年で、表杉ノ入式(氏家:1957)に位置づけられる。表杉ノ入式の土器群は、その後多方面から検討が加えられ細分が試みられて来た。今回出土した土器は器面調整という観点から、切り離し後再調整をもつという特徴がある。このような特徴をもつ土器を含む土器群には蔵王町東山遺跡出土土器(真山:1981)が知られ、切り離し後再調整を加えない土器群、仙台市安久東遺跡(土岐山:1980)等に先行すると考えられており、したがって2号住居出土の土師器も安久東遺跡等より古い時期のものと思われる。また須恵器もこれらの土師器と共伴して出土しており、同様の時期のものと考えられる。なお口縁部の肥厚する土師器坏は、他の遺跡に類例を見ない。

(2)鎌倉時代の遺物

この時代の遺物には、第1~3号溝から出土した陶器・古銭、遺構外から出土した古銭がある。 ここでは陶器について考察する。

[陶器]すべて第1~3号溝の堆積土から出しており擂鉢と甕がある。

擂鉢は図示した2点の他に体部破片が数点ある。いずれも内面に筋目をもたないものである。 甕は口縁部が、内面に沈線状の凹みが巡る縁帯で端部が突き出すもの()、縁帯をもたず 端部が丸くおさまるもの()とがある。()の中には内外面に灰釉が刷毛塗りされている ものがある。

また体部破片の中には押印(簾状格子目)をもつものも見られる。

これらの中で縁帯をもつものは中世陶器の甕に一般的に見られるものであり、甕()に近い特徴を示すものには伊豆沼古窯跡群熊狩A窯跡(工藤、藤沼地:1979)出土のものがある。しかし

甕()は熊狩A窯跡出土のものに比べ縁帯の発達が不十分で、これらのもの(鎌倉時代中~後葉)よりも古い可能性がある。甕()に見られる刷毛塗りの手法をもつものは高清水町観音沢遺跡(阿部博、加藤:1980)に見られ、口縁部の特徴もよく類以する。これは愛知県渥美地方の産で13世紀のものと考えられており、甕()も同様の年代であると思われる。

体部に押印をもつものは産地については同定できないが、押印は13~14世紀によく見られる手法である。

擂鉢については器形のうえから特徴ある変遷過程をおうことはできないが、筋目の有無という 観点から、越前窯では筋目が鎌倉中葉以降に、また瀬戸地方では室町以後に一般化するように、 筋目をもたないという事は古い要素の1つである。年代については擂鉢独自により求める事は困難 であるが、甕(1)・()との共伴関係から同様の年代(13世紀)に位置づけられよう。

(3) 桃山~江戸時代初期の遺物

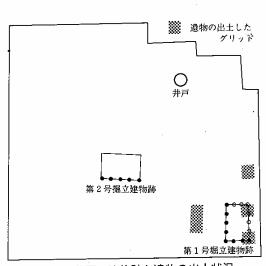
第1号井戸跡出土の陶器・土師質土器、第7号溝・第7号土壙出土の陶器がある。また遺構外から陶器・土師質土器・砥石・石鉢が出土している。これらの中で遺構外出土遺物の調査区内での分布を見ると第17図のようになり、大部分は第1号掘立柱建物跡の周辺に集中し、他の区域からは出土していない。このことからこれらの遺物は明らかに遺構に伴うとは断言できないものの、遺構と密接な関係があると考えられる。ここでは陶器・土師質土器について考察する。 [陶器] 皿・茶碗・壺・擂鉢がある。

皿は全部で4点出土しており、すべて台付のものである。淡黄色の釉が施されているもの2点と 灰白色の釉が施されているもの2点があり、後者の中で第7号溝から出土したものは見込みの部分 にあやめの花が描かれている。

これらの中で第7号土壙出土のものは釉調絵つけ等から志野と、またその他のものも美濃地方の産と考えられ、16世紀末~17世紀初頭のものと思われる。なお、第7号溝出土のものと類似するものは岐阜県土岐市大富東2号窯(楢崎: 1976)から出土している。

茶碗は第1号井戸跡10層から出土した白天目茶碗がある。高台脇から腰にかけて小さな段がつき 胴部はそのまま外傾し口縁部との境に大きな段がつくもので、これに類似したものには同志社大 学構内SK339(鈴木:1977)出土の段付天目茶碗があり、桃山~江戸時代初頭のものとされている。 壺は底部の小片で全体的形状については不明である。灰白色の釉が施されている。志野で、16世紀末~17世紀初頭のものと考えられる。

擂鉢には無釉で体部から口縁部にかけて直線的に外傾し口縁端部が丸くおさまるもの(1)と施釉で体部から口縁部にかけて外反気味に外傾し、口縁端部が鍔状に肥厚するもの()とがある。 ()()とも内面に筋目をもつ。これらのうち()は第1号井戸で前述した茶碗・・壺と共伴しており、



第17図 井戸・建物跡と遺物の出土状況

これらと同様の年代(16世紀末~17世紀初頭)であると考えられる。また()については前述した皿と同じ地点から出土しており、さらに他に時代差のある遺物を含んでいない事から、これらの皿と同様の年代(16世紀末~17世紀初頭)であると思われる。

【土師質土器】すべて皿形のもので 法量的に大形のものと小形のもの がある。これらはいわゆる「かわら け」と称される素焼きの土器で、広 く中近世の遺構から出土している が、形態的特徴からその変遷過程を

おうことはできない。上記の遺物との共伴から同様の年代(16世紀末~17世紀初頭)であると考えられる。

2.遺構とその年代

出土遺物の年代は前項のように求められた。遺構はこれらの遺物の組み合わせから次の3時期に 分類できる。

- ○平安時代の遺構 第1・2号住居の2軒の住居跡がある。
- ○鎌倉時代の遺構 第1~第3号溝と、それによって区画された平場がある。。
- ○桃山~江戸時代初頭の遺構 2棟の掘立柱建物跡、第1号井戸跡がある。これらの遺構は、距離的にも近く、遺物にも時代差が認められない事から、まとまりのある遺構群であった可能性がある。

なお、第5・6号溝、第1~6号土壙、第2号井戸については出土遺物がなく、時代は不明である。

3. 遺構の性格

ここでは検出された遺構がどのような性格をもつか時代ごと若干考えてみたい。

(1) 平安時代の遺構

この時代の遺構、遺物は調査区東側の自然堤防上から検出されたのみで、他の地区からは認められなかった。またこの自然堤防は周囲が低地にとりかこまれる事により小規模な微高地と

なっている。今回発見された2軒の住居跡は距離的にも離れ、また同じ自然堤防上で北側に隣接する青葉学園建設地の調査区から発児された住居跡の数も少なく(註1)遺構の密度は、同じく名取川流域の自然堤防上の名取市清水遺跡(阿部博、小野寺、丹羽:1981)に比べ非常に低い。

(註1 仙台市教育委員会 渡辺氏教示)

(2)鎌倉時代の遺構

この時代の遺構には舌状の自然堤防の東側に空堀で区画された平場がある。平場は西半のみを調査したもので、東半はさらに調査区外へと続くため全体的平面形・規模は直接知り得ないが、調査区内の状況と地形から平面形は方形を呈するものと考えられ、規模は40m×40mほどあると推定される。平場を巡る空堀は3本認められるが、これらは切り合い関係を持つもので、2回掘り直おされたと考えられる。この間、平場の大きさには変化はなく、堀の規模だけが拡張されている。これらの堀から出土した遺物には大きな相違は見られず、掘り変えは短い時間巾の中で行なわれたと推察される。また、平場南辺の中央と考えられる部分は、西側から延びて来た堀が途切れ、その部分には小さな沢状の地形が入り込むことから、平場への入口であった可能性がある。鎌倉時代の遺跡で、溝によって方形区画の平場を形づくる例としては仙台市今泉城、志波姫町

鎌倉時代の遺跡で、溝によって方形区画の平場を形づくる例としては仙台市今泉城、志波姫町 鶴ノ丸館跡がある。

今泉城は沖積地の微高地を溝によって方形の平場を区画したもので、南北40~50mほどの規模をもち、平場内からはこの時代の建物跡も検出されている。(註2)

また鶴ノ丸館跡は沖積地に突出する小丘陵の先端部を2重の堀によって区画したもので、内郭は50×60mあり、腰部には土塁をもつ。また内郭からは、この時代と推定される建物跡・井戸跡も検出されている。(手塚:1991)

これらの遺跡と本遺跡を比べると、堀による方形区画という点では共通するものの、規模とい う点では差異が見られ、南小泉のものはこれらより小規模である。

平場内からは撹乱による削平が著しく建物跡は検出されなかったが、本来は今泉城、鶴ノ丸館 跡同様建物が存在したと考えられる。

(註2 仙台市教育委員会 佐藤洋氏教示)

(3) 桃山~江戸時代初期の遺構

まず16~17世紀における当地を概観してみる。当時の遺跡周辺(小泉村)について述べられた文献をいくつかあげてみる。

「前略・・・・・天文正年中に国分彦九郎盛重公住す。其後宮城郡小泉に要害を築き取移し真跡古城となる。・・・・・後略」 仙台鹿の子(元録8年 - 1695)

小泉村

- 一、古城、結城七郎朝光未係結城七郎、天文年中乞未孫国分能登盛氏居城
- 一、古城、城主堀江伊勢、国分彦九郎盛重公も此二居住。伊勢曾孫惣九郎未孫堀江平九郎 仙台領古城書上(延宝年中1673~1681)
- 一、東の方若林御館の廻り。皆ふか田にて国分殿古城へ。国分寺林乞つづき申候.....後略 若林御隠居城御取立之事
- 一、御隠居御普請。御勝手次第レ可レ被遊候よし。依上薏若林に御城取立被遊候。御自身御普請にて。安房殿始直々出石を御はこひ候よし。御城東南の角に御矢倉有。北に築山御座候。御一門始御家中御屋敷敷し被成候。此節迄岩沼より山の手を通申候。…後略…」

東奥老士夜語 (17世紀末~18世紀初)

「御心ノ儘ニセラルヘキ申仰出サ」寛永4年2月23日(1627)

若林御節御普請二就テ石壁土手地形堤橋水道二悪水落ノ樋、御舟ノ瀬等ノ事仰付ラル 伊達治家記録 寛永4年5月27日(1627)

16世紀から17世紀にかけての小泉村の歴史を見ると政宗の仙台開府を境として国分氏の時代と 政宗の時代とに分ける事ができ、それぞれの時代の集落、町並の形成について見るとおおむね次 のようになる。

仙台鹿の子、仙台領古城書上によれば、開府以前天正年中(1523~1550)には、国分彦九郎盛重が青葉山からこの地に要害を築き居を構えたと言われ、阿刀田令造は「青葉山、及び小泉村・国分寺方向には散在的にせよ人家があったはずである」と述べている。(阿刀田:1936)

しかし、人家が小泉村の何処に存在したかについては融れられていない。また、東奥老士夜話は仙台開府以前之事として「......みなふか田にて...」と記載されている。

このように国分氏領下の時代の町並、集落のあり方については不明な点が多い。

開府以後の様子について小林清治氏は、寛永4年2月には若林城の築城が老中奉書によって許可され、普請は直ちに開始された。またこれに伴い城下の設置が行なわれ、若林城の周囲には一門以下家中の屋敷が連らね、米町、絹糸町等の町屋敷もおかれた。また寛永13年政宗の死後若林城は廃城となり、堀一重を残して城内の屋形も寛永16年仙台城二ノ丸に移され、附近の侍屋敷も移転されたと言われている。(小林:1954)

次に絵図等により遺跡周辺を見ると、正保2・3年(1645・6)「奥州仙台城下絵図」では、若林城は記載されておらず、安政3年(1856)「安政補正改革仙府絵図」では、古城と記され、城から西・北・東側の各々に1本の道が延び周辺はすべて畑地となっているのが認められるにすぎない。

今回発見された遺構は井戸跡と掘立柱建物跡で、遺物は16世紀末~17世紀初頭のものに限られている。また遺構の配置は町並状になるものではなく、独立した屋敷に近い形態であったと考えられる。この様な建物群は、若林城の南東約300mに位置する事、天目茶碗と出す事等という点から見て、一般農民住宅とは考えにくく、さらに遺構には建て替えの痕跡が認められないことからその存続期間は比較的短いと考えられ、わずか8年で幕を閉じた若林城下との関連を示唆するものである。

まとめ

- 1. 今回発掘調査を行なったのは、仙台市古城三丁目地内で、南小泉遺跡の東南端にあたる。
- 2.調査区は、地形的に「自然堤防」と「旧河道」の部分とからなっており、自然堤防上からは遺構が検出された。
- 3. 検出された遺構は、竪穴住居跡2軒、井戸2基、土壙7基、掘立柱建物跡2軒、溝6本で遺物には、土師器、須恵器、陶器、古銭、石製品がある。
- 4.これらの遺構は、3時期のものによって構成されている。
 - 1. 平安時代 1・2号住居跡
 - 1.13世紀 1.2.3号溝
 - 1.16~17世紀 1号井戸、1・2号掘立柱建物跡

これらの中で、16~17世紀の遺構は、時代、地理的にも近い若林城との関連が考えられる。

<参 考 文 献>

仙台市教委(1978):「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書13集:1978

仙台市教委(1982):「南小泉遺跡」仙台市文化財調査報告書35集:1982

氏 家 和 典 (1957):「東北土師の型式分類とその編年」歴史的第14幅:1957

真 山 悟 (1981):「東山遺跡-東北自動車道遺跡調査報告書」:1981

工藤・藤沼地 (1979):「熊狩A窯跡」東北歴史資料館料集1」:1979

加藤・阿部博(1980):「観音沢遺跡 - 東北新幹線遺跡調査報告書4」:1980

藤 沼 邦 彦 (1976):「宮城県地方の中世陶器」予察、東北歴史資料館研究紀要2:1976

藤 沼 邦 彦 (1977): 「宮城県出土の中世陶器」東北歴史資料館研究紀要3:1977

手 塚 均 (1981):「鶴ノ丸館跡 - 東北自動車遺跡調査報告書」:1981

手塚 均(1981):「西野館」米山町文化財調査報告書第1集:1982

阿 部 恵 (1982):「亘理町文化財調査報告書第3集」:1982

柴 桃 正 隆 (1972):「仙台市領内古城・館」:1972

阿 刀 田 令 造(1946):「仙台市城下絵図の研究」:1946

楢 崎 彰 一 (1976): 「濃の古陶」光琳社出版:1976

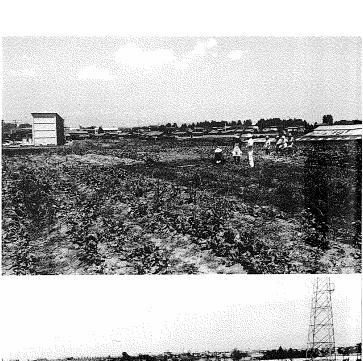
小 林 清 治 (1954): 仙台市史1:1954

阿部博・小野寺・丹羽 (1981):「清水遺跡 - 東北新幹線遺跡調査報告書5」: 1981

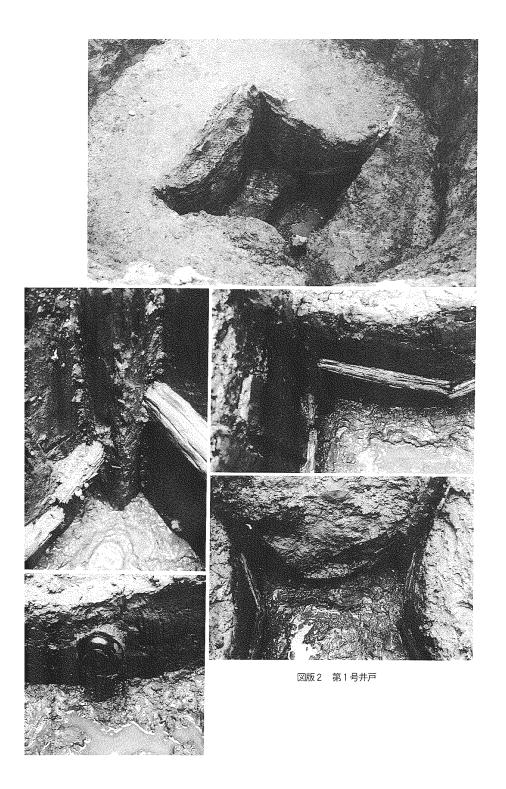
鈴 木 (1977): 同志社大学キャンパス出土遺物図録: 1977

土 岐 山 武 (1980): 「安久東遺跡 - 東北新幹線遺跡調査報告書 4」: 1980

図版1 遺跡近景 (調査前) 調查風景 (遺構確認調查) 第2号住居跡





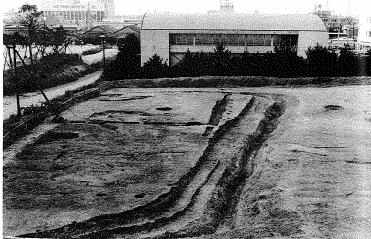


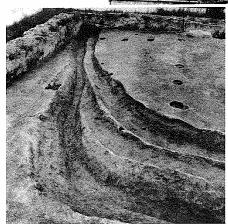


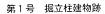
第1、2、3号溝

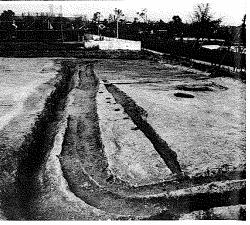


第1、2、3号溝









第2号 掘立柱建物跡

